# 私と日本語の図書との出会い

嘱託助教　　焦　毓 芳（上海外国語大学）

今年の夏、上海展覧センターは人で賑わっていた。赤い風船、赤いリボンと赤いアーチ門が溢れ、「読書好き・生活好き」をテーマにする2009年上海ブックフェアが盛大に開幕した。一週間にわたるこのブックフェアは、販売2800万元、入場者24万人という記録を残した。特に中国でも絶大な人気を誇る渡辺淳一氏がサイン会を開催して、会場ではフロアからあふれたファンが階段にも長い行列を作る騒ぎとなった。そのファンの一人として私もそこにいた。私は日本の小説や歴史の本が好きで、そのきっかけは学生時代に日本語の図書との出会いから言わなければならない。

大学に入って専門は日本語だから、日本語の原文書籍に触れたかった。しかし、当時の図書館はとても粗末で、蔵書も多くなかった。かたい言語学の本以外に、小説は専ら夏目漱石、島崎藤村、芥川龍之介など日本文学大家の作品ばかりであった。勇気を出して何冊か借りたが、結局「難解な書物」として、枕元に置いただけで、一冊も最後まで読まなかった。日本語のものは読みづらいと半分諦めた時、先生は教員資料室から日本語の雑誌や村上春樹、吉本ばなな、村上隆などの小説を持ってきてくださった。一部は日本から寄贈された図書で、本の最初のページに寄贈されたところが書いてあるから分かる。この本ははるか遠く異国から日本の友人の素晴らしい願望を伴って海を渡り、私の所へ来たものかもしれないと思うと、読書の情熱が高揚した。それから、みんな辞書を引きながら小説に没頭する姿は今もはっきり覚えている。村上春樹の整然として洗練された自然な筆致は何回読んでも飽きない。そして、吉本ばななのものはいつも淡々とした悲しみが漂って、読み終わったら、何か切なくて暖かいものに心が打たれた。私は先生や日本の友人に深く感謝している。彼らのおかげで私は日本語の図書に出会った。これらの本は私に窓を開いてくれた。窓の外には私のよく知らないそして夢中になる日本の世界がある。私はだんだんこの世界を理解し始めた。私たちと同様に勤勉で、喜怒哀楽に満ちた生活を送っている大和民族の人々を。

その時の教員資料室は私にとってまるで宝石箱のようであった。学生は利用できないから、いつも外から中の様子を覗いた。一列一列の書架にたくさんの言葉が書かれた一冊一冊の本がびっしり詰まって、読書の雰囲気に満ち溢れて、美しい日本語が構成する世界に私は憧れていた。いつか私もその輝かしい世界に足を踏み入れたい。その念願が叶ったのは私が教員になってからである。私は立ち去るのを忘れて、ほとんど毎日のように資料室の蔵書に向き合っていた。私は最初にその蔵書の量と種類の多さに驚かされた。言語、文学、教育、社会、経済、歴史など多くの分野に及び、百科全書や辞書類もたくさんある。その場のすべてが共同で日本という世界を築いている。その驚きと喜びを胸に、数年後、私も担任になって、当時先生のように学生に本を紹介し始めた。彼らに一つ窓を開いてあげれば、きっと私のようにいろいろ感銘を受けるに違いないと確信しているから。そして、最近、この資料室は学生も利用できるようになったという朗報を聞いた。かつてはほとんど原文書籍に触れることができず、日本語の学習といえば、教師に従って、教科書と文法を学ぶというのがすべてであった。今、これだけ多くの原文書籍が読めるようになった現在の大学生がとてもうらやましく、彼らの喜ぶ姿を想像すると私まで心から嬉しくなってきた。

実は中国の出版業界においても最近明らかな変化が見られる。これまで日本の文学といえば、村上春樹、渡辺淳一などで占められたが、最近日本でベストセラーとなった本も次々に翻訳され、翻訳のジャンルも作品の数も翻訳を手がける出版社も拡大している。本という窓口を通して、中国人の日本への関心は確実に広がっている。相互理解を促す中日の図書はこれからも大きく活躍すると思う。